

トルコにおけるクルド問題

今井 宏平

●「クルド問題」とは何か

トルコにおける「クルド問題」(Kürt Sorunu/Kurdish Question)と聞くと、すぐに思い浮かぶのがトルコ政府とクルディスタン労働者党(PKK)の抗争であろう。トルコ政府とPKKは1984年から30年以上に渡りトルコの南東部、もしくは北イラクに跨って戦闘を続けてきた。この戦争で命を落とした人の数は4万人以上と言われ、2015年7月に停戦が破棄されて以来、その数は増え続けている。トルコ政府とPKKの抗争に代表される安全保障の問題はクルド問題の中心であるが、全体の1つの側面であることも事実である。クルド問題とは、トルコ共和国において、いかにトルコ人とクルド人が平和裏に共生していけるかを模索することであり、安全保障、経済改革、社会政策、トルコ政府とPKKの抗争で住居を追われた国内避難民の解消などがその範疇に含まれる(参考文献①、pp.11-12)。トルコにおいてはクルド人との関係に関して、クルド問題以外にも「東方問題」(Doğu Sorunu/Eastern Question)や「南東部問題」(Güneydoğu Meselesi/Southeastern Problem)といった言葉が使用されることがある(参考文献②、p.7)。前者は主に民族主義政党などによって使用されるもので、クルド人の存在を否定している。後者はクルド人地域の低開発に焦点を当てており、クルド問題に包含されるものである。

●民族主義運動から政治運動へ

1923年にトルコ共和国が成立した直後から、クルド人の動向は大きな問題となった。オスマン朝(帝国)で一定程度の自治を獲得していたクルド人は、独立戦争においてムスタファ・ケマルに協力した。それは、部族がアイデンティティの中心であり、信心深く保守的なクルド人はオスマン朝が採用してきたカリフ制を

ケマルが継続してくれると考えていたためである。カリフ制とは、行政の長が宗教的にも権威をもつという制度で、オスマン朝下ではスルタンがオスマン朝の君主であると同時にムスリムの最高権威であった。しかし、徹底的な世俗化を志向したケマルはカリフ制を廃止、クルド人にトルコ人への同化を強く迫った。こうした動きに反発し、勃発したのが1925年のシェイフ・サイードの乱であった。しかし、シェイフ・サイードの反乱は失敗に終わり、その後、1927年から30年のアララト山での反乱、1936年から38年のデルスィム(現在のトゥンジェリ県)での反乱も相次いで鎮圧され、部族という単位でのクルドの抵抗運動は収束した。

新たにクルド人のトルコ共和国に対する抵抗が始まるのは1960年代であった。トルコにおいて左翼運動が活発化するとともに、搾取される対象としてクルド人に新たに光が当てられた。また、クルド人、特に都市部に集まった大学生が左翼運動に参加していった。PKKの党首、アブドゥッラー・オジャランもそうした1人であった。オジャランは1973年から学生組織を立ち上げ、1978年に正式にPKKを設立、1983年からトルコ政府との抗争を開始した。PKKは1990年代にトルコ政府と軍事衝突を繰り返すが、1999年にオジャランが逮捕されるとその影響力は一時的に弱まった。2003年以降、テロ活動を再開するが、2000年代はPKKを傘下の1つとするクルディスタン共同体連合(KCK)を中心に、政治活動を含むより包括的な活動を展開している。

●解決の糸口がみいだせない現状

公正発展党政権は、PKKとこれまで3度の和平交渉を試みてきた¹⁾。しかし、最も長く続いた2013年3月からの停戦および和平交渉が2015年7月に破棄されて以降、解決の糸口をみいだせずにいる。その理由とし

ては以下の4点が考えられる。まず、上述したように停戦破棄以降、あまりに多くの犠牲者がでている点である。2点目として、トルコ政府がPKKと同一視している民主統一党（PYD）がシリアにおいてアメリカおよびロシアの支援を受けるなど、その正統性を増している点である。トルコ政府はPYDとPKKが連帯していると考えている。3点目として、クルド政党として2015年6月および11月の総選挙で初めて10%以上の得票率を獲得し、大国民議会で議席を得た人民民主党（HDP）とPKKの間の世俗派クルド人に対する主導権争いが指摘されている。4点目として、単独与党の公正発展党が民族主義政党でクルド問題の解決に否定的な民族主義者行動党と協力関係を強めており、クルド問題解決の重要性が公正発展党のなかで相対的に低下している点である。

●経済的苦境に陥るクルド人居住地域

冒頭で指摘したように、クルド人問題にはクルド人居住地域の低開発の問題も含まれる。トルコ政府は1980年に水利開発プロジェクト、「南東アナトリア開発計画」（GAP）を立ち上げるなど、クルド人居住地域の開発に力を入れてきたものの、低開発状態は解消されていない。2016年のトルコ統計局の失業率の数字をみると、トルコ全体の失業率が10.9%であったのに対し、クルド人が多く住むマルディン県、バトマン県、シュルナク県、シルト県によって構成されるトルコの最南東部の失業率は28.3%であり、トルコ全体で最も高い数値であった（参考文献③）。同地域が低開発に喘ぐ要因として、PKKが同地域のインフラを破壊したこと、トルコ政府とPKKの抗争が激しいこと、天然資源に乏しいことなどが指摘できる。

●一枚岩ではないクルド人

トルコのクルド人組織ではHDPに連なる世俗主義政党、非合法武装組織では世俗主義の立場をとるPKKだけに光が当たりがちであるが、トルコ国内だけでもクルド人とその組織は多様である。言語的にはクルマンジーと呼ばれるクルド語を話す人々が多数派であるが、ザザと呼ばれる言語を話すクルド人も多い^②。また、スンナ派ムスリムのクルド人とシーア派ムスリムのクルド人も多数存在する。スンナ派ムスリムのクルド人の多くは公正発展党に投票している。公正

発展党が「最大のクルド政党」と呼ばれる所以である。また、1990年代にPKKと抗争を繰り広げた非合法武装組織、トルコ・ヒズブッラーはスンナ派クルド人の組織であった。2000年に武力闘争を牽引してきた幹部たちの多くが逮捕されたことにより、2000年代を通して、トルコ・ヒズブッラーは武装闘争から政治運動を模索する組織へと転換を図った。そして設立されたのがフエダー・パルという政党である。しかし、地下に潜ったトルコ・ヒズブッラーの関係者のなかには「イスラーム国」の戦闘員としてシリアに渡った者もいるようである。一方、シーア派ムスリムのクルド人としてはアレヴィー派が多い。たとえば、1938年のデルスィムの反乱は、アレヴィー派のクルド人の反乱であった。

繰り返しになるが、トルコにおけるクルド問題は多様な側面があり、また、トルコ国内のクルド人の間でも言語や宗派、トルコ政府との関係に関する考えが大きく異なっている。トルコ政府とPKKの和平交渉は不可欠であるが、それでもクルド問題全体の解決の一步に過ぎない。

（いまい こうへい／アジア経済研究所 中東研究グループ）

《注》

- ① 3度の和平交渉に関しては、参考文献④、240～250ページを参照。
- ② クルド人の多様性に関しては、参考文献⑤、2～14ページを参照。

《参考文献》

- ① Serkan Yolaçan, *A Roadmap for a Solution to the Kurdish Question: Policy Proposals from the Region for the Government*, TESEV Publications, 2008.
- ② Yılmaz Ensaroğlu, “Turkey’s Kurdish Question and the Peace Process,” *Insight Turkey*, Vol. 15, No. 2, 2013.
- ③ “Labour Force Statistics, 2016,” Turkish Statistical Institute, Press Release No. 24635, 23 March 2017 (<http://www.turkstat.gov.tr/PreHaberBultenleri.do?id=24635>).
- ④ 今井宏平『トルコ現代史』中央公論新社、2017年。
- ⑤ 粕谷元「分化する『クルド・アレヴィー』アイデンティティ」『現代の中東』No. 28、2000年。